宮武さんが信仰をもったころ

福島　勲

保谷福音センターの皆さん

宮武さんのクリスチャンネームはトマスである。それは江古田の伝道所に出入りしていたときに付けられた。そのネームは彼の信仰をよく表している。簡単には信じない疑い深い信者である。論理的に納得できないことは信じない人であった。

彼の叔父はお寺の住職であったが、跡継ぎとなる子どもがいなかった。そこで親同士で話し合い、宮武さんをお寺の住職の養子にすることにした。いつの間にかそれを知った彼は猛烈に反発した。当時彼は宗教を阿片のように考えていたからである。そして大胆にも、宗教を片っ端から撲滅してやろうとの野心を抱くまでになった。

たまたま隣町に住んでいたカナダ人宣教師がキリスト教を伝えていることを知って「ぎゃふん」と言わせようと訪ねた。宣教師の名はダン・フィブス。この人はカナダのアルバータ州スリーヒルという広大な草原の田舎からやって来

た。戦後の日本人に深い同情と愛を抱いていた。

宮武さんは挑戦的に話しかけたようである。しかし、人の良い温厚なフィブスさんはそれに乗らなかった。そして宮武さんが帰る間際に新約聖書の分冊ヨハネ福音書を手渡し一つの約束をした。「この福音書を３回読んで下さい。それからもう一度お出で下さい」というものである。

宮武さんは「何だ、こんな薄っぺらい本、３度でも４度でも読んでやるわい。堂々と挑戦せーい」とばかり思って帰ったようだ。

家に帰るなり、すぐに読み始めた。一気に終わりの21章まで読み切ってしまった。そして２度目、少し一度目よりも時間がかかったが読み切った。約束は３回である。３度目も同じく読み始めたが、第１章からつまずいてしまった。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
この言は初めに神と共にあった。
すべてのものは、これによってできた…」（注１）

「この初めにとは、いつの初めなのだ？」「言とは何だ、だれだ、だれを指しているのだ？」「神と共にあったとあるが、神とは何だ？…」

次から次へと質問が出てきた。

「言なる神とは何を意味しているのか？」

簡単に一節一節を読み進むことができなかった。

「神を見た者はまだひとりもいない。
ただ父のふところにいるひとり子の神だけが、神をあらわしたのである」
（注２）

との一節でもつまずいた。

「父とは誰を指しているのか。ひとり子なる神とは誰のこと？」

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。
それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」
（注３）

と第３章の中途まで読んでその先に進めなかった。フィブス氏に挑戦するどころか、これらの質問をしたいと思った。そしてフィブス宅を再訪問した。

やさしく迎えられた。フィブス氏の温かいまなざしに、氷のように固かった心は暖められていった。
彼のあらゆる疑問が払拭され、そして「どうぞ、罪深い私をあわれんでください。救って下さい」と涙ながらに神に祈った。

その帰る間際に私は初めて宮武さんに出会った。玄関先で泣いて祈っている彼の姿を今もはっきり覚えている。

彼よりも少し前にイエス・キリストを信じていた私は、フィブス宅で毎回彼と出会うようになる。まもなく、どこに出かけるのも一緒になった。

宮武さんはイエス・キリストを信じた時の気持ちをフィブス宅での集会でよく語られた。当時の日記に残されていたので、以下に紹介させていただく。

自然は神の特質なり、性質を表していると思う。全部ではないにしても、神の一特性を表していると思う。だから自然を知ることは大事なのである。しかし、あくまでもそれは部分的なことなのである。

同じことかもしれないが、人間を知ることもしなければなるまい。人間を知って初めて神によって造られた人間は、その原罪、そして神による救いが分かるのだろうと思う。いずれにしろ神を求めていくことが究極の目的である。

だから、神を知り、神に近づくためには、神を見上げつつ、まず人間を知る努力をし、また神の特質なり、その意志としての自然を知る努力をしなければならない。

神様に近づくことが僕の人生である。神を知ろうとする努力が全てである。何を研

究するにしても、神を見上げていかなければならないし、また、神に近づこうとするためには、あらゆる面から研究しなければならない。

しかし、それはあくまでも神に対する誠実をもってするのであり、それは願いをもって、涙をもって戸を打ち続けることなのであって、自ら神の真理に到達しようというのではない。
そのとびらを自らの力で開けようなどというのではない。自分がいかに弱い人間であるか、だらしない人間であるかはよく知っているのであるから。

そんな大それた事を出来るわけもなし、また思いたくもない。この宇宙の真理を知り尽くすことは出来ないし、また、人間ひとつをとってみてもその深い意味、生命については知ることも出来ないであろう。

ただできることは、戸を開けてくれるまで、その奥深いところを悟らしてもらうまで、その戸をたたき続けるだけなのである。そして主の導きを信じつつ歩み続けるのである。

信仰というものは、自分の心を偽って無理やりにある事柄を飲み込むことではない。歪んだ信仰はある事を自分でしておきながら人に隠すために、苦しさから逃れるために自分自身にその事をしなかったと言い聞かせているようなものである。プラスとマイナスとは相容れないのである。それを無理にひもで縛っても、一度、ひもが切れた時には、くっつけなかった時よりもひどい結果になるのである。

信仰とは心から湧き出てくるものであり束縛ではない。信仰は恵みであり、獲得するものではない。神に対する謙虚な心が信仰をよび、信仰は人の心と神とを堅く結び付けてくれるのである。

主の御声、御霊の声を世の声、悪魔の声の中から聞き分け、主の御旨を知りつつ歩むためには、主の声がよく聞こえるように常に主の近くにいなければならない。

「わたしの言葉のうちにとどまっているなら真理を知るであろう。その真理はあなたがたを自由にさせるであろう」と主はおっしゃった。

たしかに私たちが主の御声を聞くためには一度に長い時間祈ることではなく、毎日

聖書を読み、主の御言葉をさぐり、また祈りによって主に感謝し、主と交わっていることこそ最も大切なことなのである。

どんなことがあっても自分を見たり、人を見たりしてはいけない。ただ主を見上げていくべきである。自分の弱さを見つめていたり、人の立派さや醜さにとらわれていたりしてはならない。主は全てをあがなって下さった。いつも主の近くにいて必要なものは主に願い求めれば主は全てを良きに導いてくださる。

イエス様は私たちを涙をもってあわれんで下さり、あらゆる苦しみを忍び、自分を全く打ち砕いて、一切の妥協をしりぞけ、最後の恐るべき杯を飲み干す（注４）まで神の命令に自分の全てを殺して従っていったのである。

その主は「だれでもわたしについてきたいと思うなら自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われるのだから自分の身を打ちたたきつつ罪と肉とに妥協せず、主の御足の跡をしっかりと踏み従っていこう。常に神を第一に愛し、常に神を第一に恐れ、常に神に頼らねばならない。

イエス様、この愚かな、無力なしもべをかえり見て下さい。トマス程の信仰もないしもべをお許し下さい。

（以上1961年当時20歳の日記より）

フィブス氏がカナダに帰国中、彼の姉マートル・ベーカーさんにも育まれた。彼女はカイロの整体師でもあり、体の弱い宮武さんはよく彼女の治療を受けた。また彼女の給食にも養われた。

宮武さんはじめ20代の独身の若者の集いに世話好きだが口煩い新沼さんが加わった。また南大泉から佐藤さん夫妻が、近くの清水建設のアパートから鈴木さん夫妻、小野寺さん夫妻、斉藤若子さんらも加わった。また下保谷から中島栄子さんや佐藤玲子さんが、泉町から三隅さん兄妹も集うようになった。

ベーカーさんは昼食後、決まって我々に聖歌を歌わせた。それは消化にも良いのだと、霊肉ともに健康に良いことを勧めた。

カイロの治療も給食も無報酬で黙々と仕えてくれた。この宣教師姉弟の生き方に、集う誰もが感銘した。

後々、宮武さんは重度障害児教育（東京教育大学付属桐が丘養護学校、京都教育大学教授）に携わるようになったが、その教育のあり方に影響を与えていると思う。

最後に、宮武さんの奥さん（美子夫人）についての感想は求められていないが一言。

「彼女の良さは、茫洋としているようでしっかりしている。そして、よりしっかりしている二人の娘たちによって支えられている」
「彼女は信仰は無いようで意外と有る」。

これは、あわれみ深いイエス様のもとに召された宮武さんの声のように聞こえる。

（注1）ヨハネによる福音書第1章1節～3節
（注2）同第1章18節
（注3）同第3章16節
（注4）「最後の恐るべき杯を飲み干す」とはイエス・キリストが全人類の罪の身代わりとして十字架刑を受けたことをさす。